

精神障害者スポーツに参加している精神障害者及び指導者の活動満足度とその影響要因に関する研究

館山 翔, 石田賢哉

青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

抄 録

〔目的〕 本研究はアンケート調査を行い、精神障害者スポーツの参加者から見る満足度の影響要因について検討するとともに、精神障害者スポーツが参加者に対して果たしている役割を検証することを目的としている。さらに参加者の役割や、参加者の持つ精神障害者スポーツへのイメージとの関連に焦点を当て、検証する。

〔方法〕 本調査の対象は東北圏域で精神障害者スポーツ（ソフトバレーボール競技）を行なっているチームの指導者と選手である。本調査はオンラインアンケートや郵送を利用して実施された横断的調査であった。

回答数は合計で75名での回答が得られた。すべての調査票をチェックし有効であった調査票を分析対象とした（75名中73名が有効回答）。活動満足度スコアは、「所属しているチームの活動」、「運営の在り方」、「参加者間の関係」の3つの因子から構成されていた。単回帰分析で有意であった2項目を独立変数、満足度スコアそれぞれを従属変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。

〔結果〕 「勝利」のイメージを持っている参加者は「参加者間の関係」について低い満足度を示した。また、指導者は選手に比べ「運営の在り方」について低い満足度を示した。

〔結論〕 勝利にこだわることで精神障害者スポーツの満足度の低さにつながっていると考えられる。競技性を組み込むことで参加者が「もっと上手になりたい気持ち」などの向上心が高まることで、現状に不満を感じていると推測される。そしてこのように向上心を持ち、現状に満足していないということに競技性のスポーツの意義があると考えられる。

《キーワード》 活動満足度, 精神障害者スポーツ, 競技性

I. 緒 言

障害者スポーツの意義は「心身の健康、体力の維持増進」、「障害の克服、軽減」、「精神的ゆとりの獲得」、「社会参加の促進」、「周囲への理解・啓発」が挙げられる¹⁾。このことから障害者スポーツは障害者の身体の健康だけでなく、精神的な健康、社会への働きかけの効果が有り、大きな役割を担っている。

障害者スポーツは障害種別ごとに身体障害者スポーツ、知的障害者スポーツ、精神障害者スポーツの3つがあり、精神障害者スポーツの主体は精神保健福祉連盟である。全国障害者スポーツ大会では、精神障害者の出場資格を年齢13歳以上で精神障害者福祉手帳の交付を受けている者、又はその取得の対象に準ずる者としている²⁾。以前までの精神障害者スポーツは余暇活動の充実やリハビリテ-

ションを目的としており³⁾、精神疾患の患者に多くのストレスにならないように楽しむことを目的の活動としてスポーツを奨励してきた⁴⁾。精神障害がある人たちのスポーツ活動は、全国障害者スポーツ大会の正式種目がソフトバレーボールのみであり、身体障害、知的障害のものと比べて発展過程にあり、他の2障害との遅れているという指摘もある⁵⁾。精神障害者スポーツが遅れている理由として、身体障害者スポーツはパラリンピック、知的障害者スポーツではスペシャルオリンピックスなど世界的な大会が開催されているのに対して、精神障害者スポーツでは世界的な大会がいまだに開催されていないことも理由の1つとして考えられる。

日本で精神障害者スポーツ大会開催や組織育成が始まったのは1999年のことで、2001年に宮城県において競技性を重視した第1回全国精神障害者バレーボール大会が開催され、2008年に全国障害者スポーツ大会においてようやく精神障害者バレーボール競技が正式に認められた⁶⁾。そして、現在では精神障害者スポーツの国際化の動きが報告されており⁷⁾、徐々に精神障害者スポーツが世界的にも広がりを見せていることが分かる。

連絡先 石田賢哉 (E-mail: ishida@yamaguchi-pu.ac.jp)

山口県立大学社会福祉学部

〒753-8502 山口県山口市桜島3-2-1

Tel: 083-929-6209 Fax: 083-929-6209

(2021年12月27日受付：2022年3月14日受理)

精神障害者スポーツが世界的な広がりを見せた背景には「競技性」としてのスポーツが取り組まれたことが挙げられる^{3,8)}。また、精神障害者スポーツが注目されたのは「競技性」が組み込まれてからであり、そこには競技性スポーツを行うことで「対戦相手との競争によって自分やチームが高められ成長していく『相乗性』の過程がある」という競技性の精神障害者スポーツが持つ特有の意味があるという報告もされている⁹⁾。このことから障害者スポーツの中でも精神障害者スポーツは活動するうえで競技性を組み込むことで発展につながったと考えられる。つまりレクリエーション的要素と異なり、スポーツの勝ち負けにこだわるのが精神障害者スポーツにおいて重要な要素の一つとなっているのである。

障害者に対するスポーツは、競技性を組み込むことにより、健康維持などの身体的健康や、精神的なゆとり、社会参加の促進等の、多様な役割を担うことに繋がっている。また、その中でも精神障害者スポーツは競技性を組み込むことで活動も発展に繋がっている。本研究では、精神障害者スポーツ参加者に精神障害者スポーツをどのように評価しているのかを満足度という評価軸から回答を求め、精神障害者スポーツが参加者に対して実際に果たしている役割や課題を検証することを目的とした。さらに、精神障害者スポーツの参加者自身が、精神障害者スポーツにどのようなイメージを有しているのか、そのイメージと満足度の関連を検証することを通して、精神障害者スポーツが参加者に対して果たしている役割や、参加者からみる精神障害者スポーツの意義や課題について検討をおこなっていく。

II. 方法

1. 調査の対象

本調査では、精神障害者スポーツの中でも全国障害者スポーツ大会の正式種目として登録している精神障害者ソフトバレーボール競技に参加している選手（以下、選手とする）指導しているコーチ、監督（以下、指導者とする）を対象とした。指導者も精神障害者スポーツに参加しているチームの一員として捉えることができるため参加者として調査の対象に含めた。対象者の選定では、障害者スポーツ協会からチームリストの提供を受け、各チームに協力依頼を文書でおこなった。協力の承諾が得られたチームを調査対象とした。

本研究のアンケート調査ではリスト内の12チームにそれぞれ10部調査票を送付し、用紙での回答が48名、QRコードでの回答が27名、合計75名からの回答が得られた。そのうち分析可能な73名を分析対象とした。

2. 調査の方法

本調査は、Google フォームを用いたアンケート調査を行った。QRコードが読み取ることができない人は、筆記用のアンケート用紙に記入してもらい回

答を回収した。QRコードと、回答用紙は各チームに郵送で配布し、調査を依頼した。

3. 質問内容

今回の調査で回答を求めた質問内容は以下の通りである。

1) 回答者の基本属性

参加者の基本属性として「性別」、「年齢」、「持っている目標」、「障害者スポーツ参加歴」、「指導者か選手か」「スポーツを始めたきっかけ（選手の場合）」について回答を求めた。

2) 満足度について

競技性を組み込んだ障害者スポーツの満足度を測定するスケールは見当たらなかったため、筆者が試行的に障害者スポーツに関する満足度スケールを開発した。スケール開発においては精神障害者スポーツの有識者の指導を受けながら18項目からなる満足度スケールを作成した（以下、活動満足度スケールとする）。活動満足度スケールでは「Q1 練習内容」、「Q2 練習頻度」、「Q3 練習環境」、「Q4 練習時間」、「Q5 練習場所への移手段」、「Q6 練習相手」、「Q7 大会の数・頻度」、「Q8 大会のルール」、「Q9 大会・練習会等の通知」、「Q10 大会の成績」、「Q11 チームの目標」、「Q12 自分の技術」、「Q13 自分の所属するチームのレベル」、「Q14 地域との繋がり」、「Q15 選手間の人間関係」、「Q16 指導者と選手の関係」、「Q17 指導者と選手の関係」、「Q18 総合的な満足度」の18個を項目として、1-不満、2-やや不満、3-どちらでもない、4-やや満足、5-満足の5段階評価で回答を求めた。

3) 所属しているチームについて

所属しているチームの特徴について知るために、「活動している県」、「所属人数」、「練習頻度」、「練習時間」、「チームのレベル」、「チームの目標」について回答を求めた。

4) 精神障害者スポーツのイメージについて

精神障害者スポーツに対するイメージが、満足度にどのような影響を与えるのか明らかにするために、「挑戦」、「楽しみ」、「仲間」、「ストレス発散」、「健康維持」、「輝ける場所」「勝利」、「社会参加」、「どれも当てはまらない」の9つの項目を用いて複数選択で回答を求めた。なお、精神障害者スポーツの関係者から精神障害者スポーツのイメージに関連する用語をヒアリングし、用語を選定した。また、今後「精神障害者スポーツを続けたいか」、「精神障害者スポーツを友人に紹介したいか」について回答を求めた。

4. 分析方法

本調査では得られた回答をSPSSを用いて集計、分析を行った。アンケートの回答内容を集計し、活動満足度スケールの信頼性の検証は因子分析（主因子法、直接オブリミン）を行った。満足度に強い影響を与える要因を特定し、その影響力の強さを数量的

に検討するために、「満足度スコア」を従属変数として、アンケート項目ごとに単回帰分析を行った。独立変数として投入する変数については、性別は「男性 = 1, 女性 = 2」, 年齢は「20代 = 1, 30代 = 2, 40代 = 3, 50代 = 4, 60代 = 5, 70代 = 6」, 経験年数は「5年未満 = 1, 5年以上10年未満 = 2, 10年以上15年未満 = 3, 15年以上 = 4」, 回答者の役割は「指導者 = 1, 選手 = 2」, 練習頻度は「週2回以上 = 1, 週1回 = 2, 2週間に1回または月に1~2回 = 3, 2か月に1回 = 4」, 練習時間は「2時間未満 = 1, 2時間~3時間 = 2, 3時間以上 = 3」, チームのレベルは全国大会優勝 = 1, 東北大会優勝 = 2, 東北大会出場 = 3, 県大会・政令指定都市大会優勝 = 4, 県大会・政令指定都市大会敗退 = 5, チームの目標は「全国大会優勝 = 1, 全国大会出場 = 2, 東北大会優勝 = 3, 東北大会出場 = 4, 県大会・政令指定都市出場 = 5, 県大会・政令指定都市出場 = 6」, 精神障害者スポーツのイメージは「当てはまる = 1, 当てはまらない = 0」と変数を設定した。単回帰分析において有意であった独立変数を用いて重回帰分析（強制投入法）及び Wilcoxon 符号付順位和検定を行った。

5. 倫理的配慮

本調査は全て無記名で行い、結果は研究目的のみ使用されること、回答者が特定されないように処理を行うこと、本調査に協力できない場合においても不利益が無いことを調査票に明記した。なお、本調査は青森県立保健大学研究倫理委員会にて承認を受けた後に実施した（承認番号21006）。

III. 結果

1. 基本属性について

アンケート回答者の基本属性は表1-1, 表1-2, 表1-3の通りである。回答者の役割は「指導者」16名 (27.9%), 「選手」57名 (78.1%) であった。活動している県は「青森県」33名 (45.2%), 「秋田県」23名 (31.5%), 「宮城県」13名 (17.8%) であった。

2. 満足度の集計結果

満足度の集計結果を表2-1に示した。また、精神障害者スポーツの満足度の下位項目を表2-2に示した。

満足度が高い項目は「Q3 練習環境」「Q5 練習場所への移動手段」「Q17 指導者と選手の関係」であった。それ以外の項目は満足度が4点未満であった。特に「Q13 自分の技術」に関しては平均2.8点となり最も満足度が低い項目となった。

精神障害者スポーツへの満足度は、Q1~Q17までの合計点を算出した（以下「満足度スコア」とする）。満足度スコアのとりうる範囲は17点から85点となっている。「満足度スコア」の内的整合性を検証したところクロンバックの α 係数は0.921であった。また、「満足度スコア」と「Q18 総合的な満足度」の相関

分析をおこなった結果、ピアソンの積率相関係数は0.709 ($p < 0.001$) であり、2つの間に強い相関が認められた。「満足度スコア」の最低点は27点、最高点は85点であり範囲は58であった。平均点は60.82点、標準偏差は12.49点となっていた。Kolmogorov-Smirnovの正規性の検定を行った結果 $p = 0.338$ であり、満足度スコアの正規性は確認された。

3. 満足度スコア内のまとまりについて

満足度スコアで因子分析（主因子法、直接オブリミン）を行った。その際に4つの因子が抽出されたが、複数の因子に高い負荷量を示す項目があり、調整した結果、最終的に3因子を抽出することを適当と判断した。回転後の結果は表3に示した。

第1因子は「自分が所属するチームのレベル」や「練習時間」などといった項目が高い因子負荷量を示しており、チームについて関連した項目となった。参加しているチームのレベルや活動について表している項目群と言えるため、この因子を「所属しているチームの活動」と命名した。

続く第2因子は「指導者と選手の関係」や「選手間の人間関係」などといった項目が高い負荷を示している。精神障害者スポーツに参加している人同士の関係について表している項目群と言えるため、「参加者間の関係」と命名する。

第3因子は「大会のルール」や「大会の数・頻度」といった項目が高い負荷を示している。これらの項目は精神障害者スポーツの運営について表している項目群と言えるため、「運営の在り方」と命名する。

次にクロンバックの α 係数を用いて、それぞれの下位尺度の構成概念妥当性を検討したところ、「参加しているチームへの思い」は0.876、「参加者間の関係」は0.805、「運営の在り方」は0.856となり構成概念妥当性が認められた。また、Kolmogorov-Smirnovの正規性の検定を行った結果「運営の在り方」は $p = 0.122$ であり、「所属しているチームの活動」は $p = 0.318$ であり、正規性が確認された。

4. 満足度スコアに対する各質問項目の関わり

満足度を従属変数とし、各変数を独立変数とした単回帰分析の結果は表4の通りである。20項目のうち回答者の役割 ($p = 0.039$, $\beta = 0.267$), 勝利 ($p = 0.051$, $\beta = -0.256$) の2項目が有意または有意傾向を示した。

5. 満足度スコアと各因子への重回帰分析

作成した下位尺度と満足度スコアを従属変数とし、「満足度スコア」に対して有意が見られた「回答者の役割」, 有意傾向が見られた「勝利」の項目を独立変数として重回帰分析を行った。「参加者間の関係」が正規性の検定が棄却されたため、「参加者間の関係」については、「勝利」と「回答者の役割」それぞれにおいて Wilcoxon 符号付順位和検定を行った。結果は表5-1, 表5-2の通りである。

表1-1. 精神障害者スポーツ参加者属性表 (N=73)

	人	%	満足度 スコア 平均	標準偏差
性別				
男性	51	69.9	62.3	12.68
女性	22	30.1	57.5	11.70
年齢				
20代	13	17.8	65.5	13.81
30代	13	17.8	59.8	9.43
40代	29	39.7	59.8	12.41
50代	12	16.4	60.4	16.47
60代	4	5.5	58.0	1.41
70代	2	2.7		
経験年数				
5年未満	23	31.5	62.7	10.54
5年以上10年未満	13	17.8	58.2	14.75
10年以上15年未満	12	16.4	56.4	10.35
15年以上	14	19.2	63.1	15.66
無回答	11	15.1		
回答者の役割				
指導者	16	21.9	54.5	10.08
選手	57	78.1	62.6	12.62
始めたきっかけ (選手のみ回答)				
友人の紹介	5	9.4	69.3	24.58
その他	48	90.6	62.0	11.84
所属しているチームについて				
所属人数				
12人未満	19	26.0	60.8	12.30
12~18人未満	24	32.9	64.8	9.65
18人以上	12	16.4	55.8	17.35
わからない	7	9.6	54.7	8.26
無回答	11	15.1		
活動している県				
青森県	33	45.2	61.0	11.38
秋田県	23	31.5	63.9	12.68
宮城県	13	17.8	52.1	11.26
無回答	4	5.5		

満足度スコアに対して勝利 ($p=0.034$, $\beta=-0.256$), 回答者の役割 ($p=0.021$, $\beta=0.267$) と有意を示しており, どちらの項目も満足度スコアに対して影響していることが明らかになった。

「参加者間の関係」の満足度に影響を与えていたのは, 参加者のイメージが「勝利」であるかであった ($p=0.007$)。勝利のイメージを有している参加者は「参加者間の関係」について低い満足を示していた。

「運営の在り方」の満足度に影響を与えたのは, 「回答者の役割」であった ($p<0.01$, $\beta=0.382$)。「回答者の役割」が「指導者」の場合に「運営の在り方」について低い満足度を示した。

6. 経験年数と勝利イメージの関係

精神障害者スポーツのイメージとして尋ねた「勝利」の項目と精神障害者スポーツの経験年数との関わりを見るためにクロス集計を行った。結果は表6の通りである。精神障害者スポーツのイメージで「勝

表1-2. 精神障害者スポーツ参加者属性表 (N=73)

	人	%	満足度 スコア 平均	標準偏差
練習頻度				
週2回以上	17	23.3	64.1	10.70
週1回	30	41.1	57.3	13.16
2週に1回または月1, 2回	15	20.5	63.5	12.78
2か月に1回	2	2.7	59.0	1.41
無回答	9	12.3		
練習時間				
2時間未満	18	24.7	60.2	11.75
2時間~3時間未満	25	34.2	62.8	13.47
3時間以上	21	28.8	59.3	11.74
無回答	9	12.3		
チームのレベル				
全国大会優勝	6	8.2	68.7	14.67
東北大会優勝	13	17.8	57.5	11.65
東北大会出場	14	19.2	62.1	12.13
県大会・政令指定都市大会優勝	4	5.5	63.0	9.64
県大会・政令指定都市大会敗退	19	26.0	59.2	14.89
その他	4	5.5	58.0	6.56
無回答	13	17.8		
チームの目標				
全国大会優勝	22	30.1	60.1	15.05
全国大会出場	5	6.8	70.0	6.89
東北大会優勝	2	2.7	63.0	31.11
東北大会出場	8	11.0	56.9	5.15
県大会・政令都市大会優勝	15	20.5	60.0	11.40
県大会・政令指定都市大会出場	3	4.1	66.0	12.73
その他	5	6.8	58.3	5.44
無回答	13	17.8		
精神障害者スポーツを今後も続けたいか				
はい	55	75.3	61.4	12.84
いいえ	1	1.4	51.0	
どちらでもない	13	17.8	58.3	11.22
無回答	4	5.5		
友人などに精神障害者スポーツを紹介したいか				
はい	40	54.8	59.8	13.51
いいえ	6	8.2	69.5	10.25
どちらでもない	19	26.0	57.8	9.79
無回答	8	11.0		

利」を選択している者は, 経験年数が10年を超えている人が多く, 経験年数が長い人ほど「勝利」のイメージを持っている割合が高いことが明らかになった。

IV. 考察

1. 精神障害者スポーツ満足度の影響要因

研究の結果から, 精神障害者スポーツに対する満足として, 参加者は全体的に高い満足を示した。また, 精神障害者スポーツに対するイメージは「楽しみ」, 「仲間」, 「健康維持」という項目が多く選択されており, これらを選択した参加者は高い満足度を示した。しかし, 精神障害者スポーツに対するイメージ「勝利」と選択した参加者は低い満足度(不満)を示しており, 特に「参加者間の関係」についての低い満足度(不満)を示していた。このことか

表 1-3. 精神障害者スポーツ参加者属性表 (精神障害者スポーツへのイメージ)

		人	%	満足度 スコア 平均	標準偏差
挑戦	当てはまる	27	13.2%	59.3	14.78
	当てはまらない	43	10.1%	62.3	10.65
楽しみ	当てはまる	45	22.0%	61.8	12.08
	当てはまらない	25	5.9%	59.6	13.37
仲間	当てはまる	39	19.0%	59.5	12.02
	当てはまらない	31	7.3%	63.2	12.97
ストレス発散	当てはまる	27	13.2%	61.1	14.48
	当てはまらない	43	10.1%	61.1	14.48
健康維持	当てはまる	34	16.6%	63.3	11.68
	当てはまらない	35	8.5%	59.5	13.02
輝ける場所	当てはまる	9	4.4%	58.9	14.87
	当てはまらない	61	14.4%	61.3	12.24
勝利	当てはまる	6	2.9%	51.7	15.50
	当てはまらない	64	15.1%	62.1	11.78
社会参加	当てはまる	15	7.3%	59.0	8.17
	当てはまらない	55	13.0%	61.6	13.36
どれも当てはまらない	当てはまる	3	1.5%	57.0	8.49
	当てはまらない	66	15.6%	61.2	12.72

回答者の数=73人

表 2-1. 精神障害者スポーツへの満足度 集計結果

	1 人 (%)	2 人 (%)	3 人 (%)	4 人 (%)	5 人 (%)	無回答	平均値	標準偏差
Q1	1 (1.4)	5 (6.8)	16 (21.9)	28 (38.4)	19 (26.0)	4 (5.5)	3.9	0.95
Q2	4 (5.5)	8 (11.0)	18 (24.7)	21 (28.8)	15 (20.5)	7 (9.6)	3.5	1.15
Q3	1 (1.4)	6 (8.2)	10 (13.7)	25 (34.2)	26 (35.6)	5 (6.8)	4.0	1.01
Q4	5 (6.8)	4 (5.5)	12 (16.4)	21 (28.8)	25 (34.2)	6 (8.2)	3.9	1.2
Q5	1 (1.4)	5 (6.8)	12 (16.4)	18 (24.7)	32 (43.8)	5 (6.8)	4.1	1.03
Q6	6 (8.2)	3 (12.3)	17 (23.3)	16 (21.9)	18 (24.7)	7 (9.6)	3.4	1.28
Q7	5 (6.8)	21 (28.8)	18 (24.7)	12 (16.4)	10 (13.7)	7 (9.6)	3.0	1.19
Q8	4 (5.5)	15 (20.5)	20 (27.4)	16 (21.9)	12 (16.4)	6 (8.2)	3.3	1.17
Q9	5 (6.8)	1 (1.4)	27 (37.0)	14 (19.2)	20 (27.4)	6 (8.2)	3.6	1.15
Q10	4 (5.5)	4 (5.5)	23 (31.5)	14 (19.2)	22 (30.1)	6 (8.2)	3.7	1.17
Q11	5 (6.8)	8 (11.0)	22 (30.1)	19 (26.0)	10 (13.7)	9 (12.3)	3.3	1.12
Q12	2 (2.7)	2 (2.7)	23 (31.5)	22 (30.1)	17 (23.3)	7 (9.6)	3.8	0.97
Q13	7 (9.6)	23 (31.5)	21 (28.8)	11 (15.1)	6 (8.2)	5 (6.8)	2.8	1.11
Q14	2 (2.7)	12 (16.4)	14 (19.2)	28 (38.4)	10 (13.7)	7 (9.6)	3.5	1.05
Q15	6 (8.2)	5 (6.8)	25 (34.2)	19 (26.0)	12 (16.4)	6 (8.2)	3.4	1.14
Q16	1 (1.4)	6 (8.2)	11 (15.1)	30 (41.1)	19 (26.0)	6 (8.2)	3.9	0.97
Q17	1 (1.4)	2 (2.7)	10 (13.7)	32 (43.8)	24 (32.9)	4 (5.5)	4.1	0.86
Q18	1 (1.4)	4 (5.5)	12 (16.4)	35 (47.9)	15 (20.5)	6 (8.2)	3.9	0.87

1 = 不満 2 = やや不満 3 = どちらでもない 4 = やや満足 5 = 満足

表2-2. 精神障害者スポーツ活動満足度スケール

満足度質問項目
Q1 練習内容
Q2 練習頻度
Q3 練習環境
Q4 練習時間
Q5 練習場所への移動手段
Q6 練習相手
Q7 競技人口
Q8 大会の数・頻度
Q9 大会のルール
Q10 大会・練習会等の通知
Q11 大会の成績
Q12 チームの目標
Q13 自分の技術
Q14 自分が所属するチームのレベル
Q15 地域とのつながり
Q16 選手間の人間関係
Q17 指導者と選手の関係
Q18 総合的な満足度

表3. 精神障害者スポーツ満足度尺度因子分析結果

	1	2	3	α 係数
2-14. 自分が所属するチームのレベル	0.866	-0.176	0.203	
2-4. 練習時間	0.717	0.276	-0.215	
2-2. 練習頻度	0.612	-0.023	-0.156	
2-1. 練習内容	0.591	-0.154	-0.259	
2-3. 練習環境（設備や道具など）	0.586	-0.337	0.069	0.876
2-13. 自分の技術	0.481	0.077	-0.004	
2-6. 練習相手	0.416	-0.226	-0.174	
2-12. チームの目標	0.36	-0.323	-0.155	
2-11. 大会の成績	0.335	-0.189	-0.172	
2-17. 指導者と選手の関係	-0.114	-0.992	-0.054	
2-16. 選手間の人間関係	0.122	-0.752	-0.023	0.805
2-5. 練習場所への移動手段	0.242	-0.435	-0.267	
2-9. 大会のルール	-0.11	0.113	-0.947	
2-8. 大会の数・頻度	0.122	-0.156	-0.713	
2-10. 大会・練習会等の通知	0.117	0.023	-0.701	0.856
2-7. 競技人口	0.044	-0.213	-0.607	
2-15. 地域との繋がり	0.184	-0.202	-0.288	

ら、精神障害者スポーツの満足度には参加者が持つ精神障害者スポーツに対するイメージが影響しており、その中でも勝利にこだわる参加者が現状への満足度が低いと考えられる。

深見らの調査では、チーム競技において自分たちの意見が反映されていない選手は相対的に満足度が低くなると述べられている¹⁰⁾。今回の研究結果から

も分かるように勝利にこだわる人は少数派である。そのため、勝利にこだわることを目的としている参加者は自分の意見を参加者間で共有できない現状に不満を感じていると考えられる。しかし、競技性を組み込んでいるスポーツを行う上で勝利にこだわり、もっと上手くなりたいという向上心が現れることは当然の流れであると考えられる。精神障害者スポー

表4. 満足度スコアに対する各項目の単回帰分析結果

	β	p 値
性別	-0.181	0.167
年齢	-0.125	0.342
経験年数	-0.015	0.911
回答者の役割	0.267	0.039*
練習頻度	-0.023	0.865
練習時間	-0.041	0.762
チームのレベル	-0.119	0.390
チームの目標	-0.055	0.695
精神障害者スポーツへのイメージ (複数選択)		
挑戦	-0.118	0.374
楽しみ	0.084	0.527
仲間	-0.149	0.259
ストレス発散	-0.009	0.947
健康維持	0.150	0.261
輝ける場所	-0.065	0.624
勝利	-0.256	0.051†
社会参加	-0.084	0.528
どれも当てはまらない	-0.062	0.645
精神障害者スポーツを今後も続けたいか	-0.111	0.401
友人などに精神障害者スポーツを紹介したいか	-0.044	0.743

*: $p < 0.05$
 †: $0.05 < p < 0.1$

表5-1. 「満足度スコア」「所属しているチームの活動」「運営の在り方」に対する「勝利」「回答者役割」の影響度

	満足度スコア					所属しているチームの活動					運営の在り方				
	B	標準誤差	β	t 値	p 値	B	標準誤差	β	t 値	p 値	B	標準誤差	β	t 値	p 値
勝利	-10.966	5.039	-0.256	2.176	0.034*	-5.034	2.930	-0.219	1.718	0.091	-2.435	1.889	-0.154	1.289	0.202
回答者の役割	8.701	3.674	0.267	2.368	0.021*	3.514	2.136	0.21	1.645	0.106	4.285	1.336	0.382	3.208	0.002**
R2 乗															
調整済み R2 乗															

*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$
 強制投入法による重回帰分析

表5-2. 「精神障害者スポーツイメージ (勝利)」及び「参加者の役割」と「参加者間の関係」との関連

	n	平均ランク	順位和	Wilcoxon の W	p 値
参加者間の関係	勝利該当	6	13.5	81.0	0.007**
	勝利非該当	59	35.0	2064.0	
参加者間の関係	指導者	14	27.8	389.0	0.174
	選手	53	35.6	1889.0	

** : $p < 0.01$
 ノンパラメトリック検定
 ※勝利非該当64名のうち5名がスコアを算出できない

ツ実態調査研究事業平成25年度報告書によると、スポーツが持つ力についてもっと上手になりたいという気持ちが、課題を乗り越える力となると報告されている¹¹⁾。このことから、もっと上手になりたいという向上心が様々な課題を乗り越えるために重要な要素となることが分かる。岡村によると競技スポーツには勝敗が付いて回り負けは挫折体験であるがこの体験から希望を育むことができると述べている¹²⁾。ここで言う希望とは負けるという経験から得られる

表6. 経験年数と勝利のイメージについてのクロス表

経験年数	勝利		合計
	当てはまる人 (%)	当てはまらない人 (%)	
5年未満	1 (4.5%)	21 (95.5%)	22
5年以上10年未満	0 (0.0%)	13 (100.0%)	13
10年以上15年未満	1 (8.3%)	11 (91.7%)	12
15年以上	3 (21.4%)	11 (78.6%)	14
合計	5 (8.2%)	56 (91.8%)	61

「もっと上手になりたいなど」の向上心のことと捉えることができ、競技性を組み込むことは参加者の向上心の獲得へと繋がっていると考えられる。精神障害のある人のスポーツが注目を集め、活発になってきたのは「競技性」としてのスポーツが取り組まれてきたことに関係があるという指摘がある⁹⁾。精神保健福祉連盟によると、精神障害者スポーツの中に競技性を重要視する視点が導入された意義は大きいと述べられている²⁾。

以上の事から、調査の結果では勝利へのこだわりを持つ参加者が「参加者間の関係」について満足度が低かった理由として、他の参加者に対して勝つためにより高い水準を求めている結果と考えることができる。この参加者の不満こそが競技性を組み込んだ精神障害者スポーツにとって重要な要素であると考えられる。

競技性という視点を組み込んだことによって発展してきた精神障害者スポーツの背景には、勝ちたいという気持ちやもっと上手になりたいといった参加者の向上心が大きく影響していると考えられる。現状に満足せず常に上を目指す向上心を持てるようになることが精神障害者スポーツに競技性を組み込んだ意義の一つであると考えられる。

2. 目的の変化の可能性

今回の研究では精神障害者スポーツに対して「勝利」のイメージを持っている参加者は「参加者間の関係」について満足度が低いことが分かった。そして、勝利のイメージを持っている参加者は精神障害者スポーツに長く参加している参加者が多かった。このことから、精神障害者スポーツに対する意識が変化している可能性があると考えられる。

今まで精神障害者にとって、スポーツの目的や目標が「仲間作り」などというものから、「勝ち負け」という新たな、より感情的な関心事に変化してきている³⁾という報告がある。また、「勝利」をイメージとして選択している参加者は精神障害者スポーツの経験年数が10年を超えている人が殆どであった。

以上のことから精神障害者スポーツに対して勝つことのこだわりのない人たちも競技性を特徴とする精神障害者スポーツに参加する中で勝ちへのこだわりをもつように意識が変化した可能性があると考えられる。

3. 競技としての精神障害者スポーツ

研究結果から回答者の役割が「指導者」の場合に「運営の在り方」に対しての満足度が低かった。これは、コロナウイルスの影響によって様々な大会、練習会等が行われなかったために精神障害者スポーツが競技として活動できなかったことが影響していると考えられる。

支援者は競技性スポーツを介してのソーシャル・インクルージョンやアンチ・スティグマを活動の目的としており、そのことが大きなモチベーションと

なっていると報告されている¹³⁾。本研究におけるもっとも身近な支援者は指導者であり、指導者は競技性という部分を重要視していることが分かる。

大会や練習試合は、他のチームと競い合う重要な機会である。そのため、指導者にとって大きなモチベーションとなっている競技性スポーツを介した目的が達成されなかったことは大きなストレスとなっていることが予測され、今回の満足度に影響したと考えられる。

4. 調査の限界

今回の調査では東北圏域で精神障害者スポーツを行っている選手・指導者を対象に満足度調査を行ったが、精神障害者スポーツを行っている他の圏域では参加しているチーム数が大きく異なるため、本調査結果が全体を表しているとは言えない。他の地域において同様の調査を実施し、比較検討をおこなう必要がある。

今回の調査では筆者が試行的にスケールを開発した。その際に精神障害者スポーツについて有識者の指導を受けたが、イメージなどの項目でまだ検討する余地があると考えられる。

競技性を組み込んでいる精神障害者スポーツのうちソフトバレーボール競技を今回は対象としたが、フットサルや卓球など現在は様々なスポーツがあり、その競技の特徴ごとに活動満足度が異なる可能性がある。

今回の調査では「目的の変化の可能性」について考察したが、変化についてはもっと継続的な調査が必要となるため今後は縦断調査が必要となる。また、「競技としての精神障害者スポーツ」についても今回はコロナウイルスの影響が大きく現れた可能性も考えられるため今後も継続的な調査が必要となると考える。

V. 結論

今回の調査では東北6県で精神障害者スポーツ(ソフトバレーボール)に参加しているチームの選手・指導者に満足度調査を行った。その結果全体的に高い満足度を示したが、精神障害者スポーツに対するイメージを「勝利」と選択した参加者は低い満足度を示しており、特に「参加者間の関係」についての満足度が低いことが明らかになった。勝利をイメージする参加者は、勝ちにこだわり、もっと上手になりたい等の向上心を有していて、それらの心理的要因が満足度に影響していると考えられる。現状に満足せず勝利にこだわり向上心を持ち活動に取り組むことこそが、競技性を組み込んだ精神障害者スポーツの意義の一つではないか。

また、精神障害者スポーツのイメージに「勝利」を選択した人が低い満足度を示したことから、「勝利」の項目を選んだ参加者が長年参加している参加者だったことから、精神障害者スポーツに参加する中で勝つことへのこだわりがあまり無かった参加者たちの

意識が勝つことへのこだわりを持つように変化した可能性があると考えられる。

謝 辞

本調査にご協力いただいた選手・指導者の方々に心より感謝申し上げます。

利益相反

本論文に関して、開示すべき COI 関係にある企業等はありません。

文 献

- 1) 後藤邦夫：障害者スポーツの現状と将来への展望. スポーツ教育学研究. 1992; 特別号: 41-48.
- 2) 公益財団法人日本パラスポーツ協会 (2021) 「全国障害者スポーツ大会開催基準要綱」 (<https://www.parasports.or.jp/promotion/pdf>, 2022年2月19日)
- 3) 公益社団法人精神保健福祉連盟 (2021) 「精神障害者スポーツ大会」 (<https://www.f-renmei.or.jp/sports/outline/index.html>, 2022年9月28日)
- 4) 大井崇弘, 四方田清, 松山毅, 他：精神障害者に期待されるスポーツの必要性と課題—ソフトバレーボール大会を中心に—. 順天堂スポーツ健康科学研究. 2014; 6(1): 34-39.
- 5) 田引俊和：精神障害者スポーツの実施状況及び課題・ニーズの把握—通所型福祉施設の実態把握を中心に—. 立命館産業社会論集. 2016; 52(2): 87-90.
- 6) 大西守：令和時代における精神障害者スポーツ. 日本精神科病院協会雑誌. 2021; 40(3): 6-10.
- 7) 大西守, 湯浅紋：日本における精神障害者スポーツの歴史と課題, (精神神経学雑誌編集委員会編), pp. 200-207 (2017) 公益社団法人日本精神神経学会, 東京
- 8) 大西守：精神障害者スポーツの歴史と今後の課題, スポーツ精神医学改訂第2版, (日本スポーツ精神医学会編), pp. 144-148 (2018) 診断と治療者, 東京
- 9) 鎗田英樹：精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及の特徴とその発展の在り方に関する探索的研究. 日本社会事業大学大学院社会福祉学研研究博士学位論文. 2018.
- 10) 深見英一郎, 岡崎祥訓：運動部活動における目標設定. 勝利志向性, 意見の反映度の実態並びにそれらが生徒の満足度に及ぼす影響. 体育学研究. 2016; 61(2): 781-796.
- 11) 公益財団法人日本パラスポーツ協会 (2013) 「精神障害者スポーツ実態調査研究事業平成25年度報告書 (3年間のまとめ)」 (<https://www.parasports.or.jp/promotion/data>, 2021年12月7日)
- 12) 岡村武彦：精神科臨床におけるスポーツの可能性. 予防精神医学. 2017; 2(1): 48-55.
- 13) 鎗田英樹, 勝嶋雅之 (2016) 「精神障害を持つ方を対象とした競技性スポーツの実施・普及に関する研究 (笹川スポーツ研究助成研究成果報告書)」 (https://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/encourage/grant/pdf/2016/2016rs_03.pdf, 2021年3月4日)

A Study on Influence on Activity Satisfaction of Members with Mental disabilities and their Sports Coaches who Participate in Sports for People with Mental Disabilities

Sho Tateyama and Kenya Ishida

Faculty of Health Science, Aomori University of Health and Welfare

.....(Received December 27, 2021; Accepted March 14, 2022).....

ABSTRACT

[Objective] This study examined influences on activity satisfaction of members with mental disabilities and their sports coaches who participated in sports for people with mental disabilities (referred to below as participants). Furthermore, this study also aimed to verify if sports for people with mental disabilities played an important role for the participants, focusing on relations between activity satisfaction and participants' roles or images of sports for people with mental disabilities.

[Methods] Subjects of this study were participants who participated in sports for people with mental disabilities in the Tohoku region. This was a cross-sectional study with a survey conducted using online questionnaires and/or mailing.

The total number of returned questionnaires was 75. All questionnaires were checked, and only valid responses were used for data analysis (73 of 75 were valid). The Activity Satisfaction Score consisted of three factors of activity satisfaction: team activity which the participants belonged to, organizational management, and relationships between participants. A forces entry method of multiple regression analysis was performed to obtain degrees of activity satisfaction statistically. The dependent variable was each of the three activity satisfaction scores, and the independent variables were the two items which were significant as a result of single regression.

[Results] The results showed that the participants with an image of "victory" in the sports had lower satisfaction with relationships between participants than the participants without this image, and that the sports coaches had lower satisfaction with organizational management than members.

[Conclusions] A strong desire of "victory" may be related to low satisfaction with sports for mental disabilities. Sports for mental disabilities includes "competitiveness". Participants with a strong desire of "victory" seem to have motivations to improve their skills by participating in competitive sports. The low satisfaction with sports for people with mental disabilities is a significant factor for participants.

Aomori J. Health Welfare, 4(1); 12-21: 2022

Key words: Degree of activity satisfaction, Sports for people with mental disabilities, Competitiveness

Corresponding author

Kenya Ishida (E-mail: ishida@yamaguchi-pu.ac.jp)

Faculty of Social Welfare, Yamaguchi Prefectural University

3-2-1 Sakurabatake, Yamaguchi city, 753-8502, Japan

Tel: 083-929-6209 Fax: 083-929-6209

Originally published in Aomori Journal of Health and Welfare (https://auhw.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=279) This is an open access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution License (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>), which permits unrestricted use, distribution, and reproduction in any medium, provided the original work, first published in Aomori Journal of Health and Welfare, is properly cited. The complete bibliographic information, a link to the original publication on https://auhw.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=279, as well as this copyright and license must be included.